



“沈黙の春”が加速する不気味な世紀

春爛漫の季節を迎えたが、市街地だけでなく農村部も静かだ。この時期、いつもであれば、あちこちで春祭りが行われ、神輿やら笛太鼓が鳴り渡って、にぎやかなはずが、新型コロナの影響で今年のお祭りはほとんどが中止だ▼山梨県にあるこの中山間地域の集落も、例年は第二日曜日に春祭りが行われる。朝から花火が鳴り響き、昼から神事が行われ、それから神輿が始まり、その後に笛を鳴らしながら旗を立てた行列が続く。この前後、各家では親戚縁者が集まって酒を酌み交わし食事をともにする。それが今年はこちらもお祭りは神輿と行列は取りやめ。少人数だけが神社に集まり、神主が祝詞をあげるだけ▼山梨は今、桃の花がピーク。山の斜面は桃色の絨毯を敷き詰めたように、見事な景観が広がる。この絨毯は年々、華やかさを増しているように見える。実は咲いた桃の花のかなりは人手をかけて落とす。摘果とは別に、その前の花の段階からかなりを間引いてしまう。これをやることで肥大した桃への成長を可能にする。ところが年々担い手は減少して手間をかけられなくなってしまう、花は咲いたままに放置されることが多くなり、これが桃畑の景観に迫力を加えることになっているわけだ▼その桃畑は人気がないだけでなく、ハチや鳥の飛来も少なくなつて、まさに“沈黙の春”であり、不気味な静けさが漂っている。収穫少し前まで毎週のように農薬が散布される。これが積み重なって生態系をすっかり変えてしまった▼新型コロナがやっかいなのは、とにかく目に見えないことである。この目に見えない不気味さで連想されるのが福島第一原発事故である。21世紀はこの不気味さとの戦いの世紀となるのであろうか。これらを必然化している構造から脱却できるかが問われている。

(土着菌)